神様のキセツ

喜楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神様のキセツ

【Ｎコード】
Ｎ２７４５Ｉ

【作者名】
喜楽

【あらすじ】
世界というものはさまざまな要素で成り立っている。

時間、空間、人、物、各種元素、目に見えるものから見えないものまで、その存在は多種多少。

それらが少しでも狂ってしまえばすべてが狂い始める。

この世は何もかもが精密に作られている。

人も、神も、世界の歯車の一つでしかない。

それに気づける存在がどれだけいるのだろうか？

モノローグ

この世界にはルールがある。

社会のルール、生活のルール、様々な所にルールがある。それは人間のみではない。動物にもそれなりのルールというものがある。

彼らも無秩序のようでいて実のところは高度な社会的生活を過ごしているのだ。この世界はルールという鎖にあふれている。

自らを抑制することなしには世界を成り立たせることはできないと、本能的に察しているのだ。ゆえに、この世界に生きる者はルールから逃れられない。ルールを破れば綻びが生まれる。

それは放っておけばやがて渦となり、すべてを飲み込む混濁になるだろう。決してルールを破ってはならない。

だが、生物とは難儀な性格の持ち主らしい。縛られれば自由を望み、解放されれば束縛を求める。特に人間にはこのようなことは顕著にみられる。

「面倒な種族だ」

動物はルールに従順だ。彼らは生きることにしか執着はしない。

それが彼らにとって最大の欲求だからだ。しかし、人間は高度な知恵と複雑な思考回路を持つ。科学などを急速に発展させることができ、文化形成においても独自性がみられ、非常に面白い生き物だ。それゆえ、彼らの欲求はとどまることがない。

より豊かに、より便利に、さらに素晴らしく、より高度に。

学問でそれらのことを知り、分析するも、欲望を押しとどめることは未だ彼らにはできない。

「さてさて俺はどうするか」

夜風に吹かれながらこれからのことに思いをはせる。が、近くでクスクスと笑う声に、まともに考えるのができなくなる。

「どうせかかわっちゃう癖にー」

姿を消していたのだろう。聞く気があったのかは知らないが、盗み聞きとは感心しない。

「ルールがあるだろ。破ることはできない」

これは正論のはずである。ルールには従わねばならない。

「ルールねー。そうだね、守らなくちゃだめだよね」

しかし彼女はそんなことはどうでもいいように軽く返してくる。さすがに付き合いが長いと色々先を読まれるらしい。やりづらいことこの上ない。

「何か言いたいことがあるなら聞くが？」

何を言ってもうまく受け流されるような気がしてならない。

「いーえ、別にありませんとも」

彼女の表情は相変わらず笑顔のままだ。これからどうするのか、考えはするが、結局彼女の言うとおりになるかもしれない。

「そういえば、もう春か」

「そうだよ。またしばらくよろしくね」

世界は常に回っている。この世界はこれからどんな変化を見せてくれるのだろうか。

「お前のせいで世界がヤバイ」

人という生き物は一つの場所にとどまれない生き物だと私は思う。変化を受け入れなければ今日をいきてはいけない。私たちに降りかかる事象は一つとして同じものはなく、それに対処する能力を常に養い続けねばならない。

だがそれは容易いことではない。特に私には。私こと凪川　加奈は変化する環境に合わせることを苦手とする生き物だ。今日も、一つ、私の環境は変化する。

「新入生、退場」

無機質な声が、私たちの退場を促す。今日という日は新たな出発の日。高校の入学式。残念なことにここ、私立桜楼館高等学校には私の知り合いなどは一人もいない。運悪く、ここに合格したのは私だけ。ほかにも合格通知を受け取った学校はあったのだが、この学校が県内でも有数の進学校であることで、担任教師に激しく喜ばれ、またここで合格したのに辞退すると不合格した人たちのあらぬ誤解を呼びそうだった。

もっとも中学時代の知り合いがいてもほぼ他人と同じだったろう。中学入学当初から卒業まであまり馴染めているとはいえず、友人はいたけれど親友と呼べる存在は一人としていなかったと思う。

「本当、面倒だな」

「まったくだ」

体育館をでると、そんな声を聞くことができる。どうしてそう簡単に他人とコミュニケーションをとれるのかが不思議でならない。私は変化が嫌いだ。小学校、中学校、高校と、なぜ出会いや別れを繰り返さなければいけないのか。ずっと同じ人たちでやっていけばいいではないか。

理屈ではわかっている。学力差の問題、私のようなコミュニケーシ

ョン力不足の人間を生み出さないように、だとか、大義名分はあるのだろう。しかし、不足している人間にとってこのシステムは苦痛でしかないのだ。

教室に戻ると、担任教師から明日の連絡を受け、そのまま解散。

「じゃあねー」

「また明日―」

席の近い人間と挨拶を交わすような関係まで持っていける人間がほとんど。そのほとんどにまだ私はいない。御託を並べはしたものの、結局私は人と上手く意思疎通する能力が他人より低い。ただそれだけ。

「ふぅ・・・」

外へ向かう人の群れにまぎれて、私も玄関へ向かう。なぜ自分はこんなにも臆病なのだろうか。気軽に隣の席の人に、

「どこから来たの？」

など、話のネタはあったはずだ。しかし、思っていても、それは私にとってとても高い壁なのだ。基本私は受動的。誰かが話しかけてくれるのをまつだけ。そんな自分が嫌いではあるものの、自分を変えるほど勇気も持ち合わせてはいない。十五年、こうやって生きてきたのだ。すぐ変えられるものならとっくにやっている。

靴を履き替えて玄関を出れば、入学した灌漑にふけって正門前に残る生徒がわずかにいる。私には進学や就職といったものは試練でしかない。単純にこの学校へこれたことを誇りにしている人をわずかながら羨ましいと思う。

「なんか、近づきにくいな・・・」

その場の雰囲気というものがある。そこは非常に「良い」空気で満たされているようで、「悪い」空気を持った私は近づきにくく感じた。しかし、そこを通らねば帰宅することはできない。今日は生徒は昼前には帰宅できるだろうから、そのうち高学年の人もここに来るはず。同学年に話しかけることもできない私にとって上の学年の人は恐怖の対象である。早々にここを立ち去りたかった。

「どうしよ・・・ん?」

正門とは反対方向。山のほうへと続く道がある。この学校は周辺には何もなく、うかがえるのは山と緑のみである。正門をでれば道路はもちろん、電車も通っているので通学手段には事欠かないが、本当に山以外にはなにもないところにある。おそらく中庭などへ続くのだろう。そういえば、校舎内は一通り回ってはいるのだが、校舎周辺はまだだった。

「この際だし、ちょっといってみよ」

そうして、人気から逃げるように私はそこに入って行った。
流石に土地は広大なだけあり、中庭も広かった。花壇などもきちんと整備され、ベンチなども設置されている。きっとここで昼食をとる人も多いだろう。周辺といっても、特に珍しいものがあるわけではない。しかし、校内を知ってから改めて外から見ると普段とは違う印象を受ける。それもきっと入学したばかりだからだろう。おおよそのところを見て回り、そろそろ帰ろうと踵を返す。

するとまた新たな道があった。しかし、これは校舎周辺の道ではなく、完璧に山へと続く道だと思われた。舗装はされていないし、奥のほうには道以外の何も見ることはできない。

「うわぁ、もっと奥があるんだ」

よく見ると、奥のほうには桜が咲いているようだった。もちろん玄

関から正門へ続く道にも桜は植えられている。まだ満開というわけではないが、なかなかに見ものである。私にはあの桜を楽しむことはできそうになかった。人の目のあるところでは何かと気を張ってしまうのだ。しかし、校舎というよりもはや山の麓、そのさらに奥など人がいるはずもない。

「もしかして、いいところみつけたかも」

ここを自分だけの場所にしよう。少し遠いけれど、お昼時間にここにお弁当を持ってきて、ゆっくりするぐらいはできる。そう思い、私はその場所へ入って行った。少しすればお目当ての桜が現れる。

「これは、野桜なのかなぁ？」

花の知識なんてほとんどない。が、植えられた、というには似つかわしくないほどその桜は美しかった。花弁の色合いや時代を感じさせる幹の質感。何もかもがほかの桜とは違う。周りを見ればちらほらとほかにも桜はあった。が、やはり最初に見たこの桜とは違う。

この桜の木だけ、私には非常に美しく見えた。

「キレイ・・・」

素直にそう呟いた。言葉がそれしか出なかった。

「そりゃあありがとうさん」

その瞬間、私の体がこわばるのを感じる。どこから声がしただろうか。そもそも人がいたのか。まったく気付かなかった。すると、その木の後ろ側にいたらしく、声の人物が姿を現した。

「ほー、あんた、違いがわかるのか？」

彼はまるで時代劇の平民のような時代錯誤のような格好だった。身長は百六十くらい。私と同じくらいだ。中学生かと思わせる容姿だが、彼が私を見る目はなにかを選定するように厳しく、幼さのかけらも持ち合わせていなかった。

「え、ま、まぁ」

私は少し躊躇しながら答えた。この人はもしかして庭師とかその類の人なのだろうか。それにしては若い。若すぎる。

「ふーんそうか、そりゃあ異常だ」

「え？」

彼はいま異常と言っただろうか。私は何か変なことをいってしまったのか。むしろ私は返事をしただけだ。桜がキレイだということのどこが異常だというのか。すると彼は、

「思ったより早く見つかってよかったよかった」

と、今度は良かった、という。もう、彼の言っていることの真意をつかむことは私にはできなかった。

「ど、どういうことでしょう？」

わからないことは素直に聞く。これは大事なことだ。

「あんたのせいで世界がやばいってことだよ」

その日から私の世界は著しく変化する。それが私に何をもたらすのかは未だ未知数で、まさにお先真っ暗状態。しかし、生きているからにはそこにとどまり続けることはできない。手探りでも、進まねばならないのだ。そして私は、しぶしぶながら今この瞬間に一歩をもう踏みだしていた。

「自分を自分と認める事象の存在」

「私のせいで世界がっ、て、さすがにそんなことは」

私が何をしたというんだろう。というか、もはや彼の言動を信じる信じない以前に、彼という人間にかかわってはいけないのかもしれないという気持ちのほうが強い。なんだか急に彼があやしく見える。いや、おそらくこの学校の敷地に時代錯誤な恰好でいるのであればもう十分に不審人物認定に合格圏内だといってもいい。

「そうだよな、信じられるわけがない」

疑心が表情にでてしまったか。それに反して彼は表情をあまり変えない。ただひたすらに、淡々と会話をこなしているといった風だった。それがまた人間味がなくて怖い。

「最初から説明をする必要があるな」

彼はいかにも面倒くさいといった視線をこちらに投げ、首を縦横に動かし、筋肉をほぐしている。

「まず、一つ俺は人間じゃない」

言葉も出ない。彼は何を言っているのだろうか。どこからどう見ても人間の体をしているではないか。彼の全身をさっっと見た結果としても、まず間違いなく彼は人間の体をしていた。

「これは実践したほうが早いな」

といって、彼は右手を私の前に差し出す。私も条件反射的に右手をだし、そして普通に握手を交わす、はずだった。

「・・・え？」

それは非常に奇妙な光景で、また異常な感触だった。私の手は彼の手をすり抜け、何もつかむことはなかった。しかし、確かに何かに触れたような感触はある。その感触は言葉では言い表せない。つかめるはずのものに掴めなかったのか、それとも逆なのか。私の脳が異次元の感覚に麻痺を起しかける。

「証明完了。じゃあ次だが――」

彼は私を置いて一人で先に進もうといていた。

「・・・ちょっ！ちょっとまって！今のは・・・？」

「俺が人間ではないという証拠」

確かに、理解せざるを得ない。彼は人間ではないなにかだ。脳が導かれるように答えを出す。

「じゃあ、あなたなんなの？」

人間ではない。それは確定した。だったらなんだ？幽霊か妖怪の類なのだろうか。今まで架空の存在と思っていたものが、目の前にいるのだろうか。

「逆に問うが、じゃあお前はなんだ？」

質問に質問で返される。そんなの、答えは一つしかなかった。

「……人間ですけど」

「それをどうやって証明する？」

証明する方法は色々ある、と思う。心拍数やレントゲン図、様々な検知や一般論を含めてもだれもが私は人間だと認めるだろう。

「そもそも人間の定義とはいったいなんだ？何が人間として定義づける要素なんだ？遺伝子か？それとも精神などの目に見えないもの？それともほかの何か？そんなもの同じものなど一つもない。お前の親が人間だからといって、お前が人間だという証拠はどこにある？」

人間の定義。考えたこともなかった。私たちは当然のように生まれ

た時から人類である。それゆえに、私たちがなぜ人類なのかということは考えたこともない。聞かれたこともない。この世界には人間ほどに知能が発達した生物はいないからだ。

「お前が聞いているのは、そういうことだ。お前の問いに答えたところでお前が納得する答えはおそらくないだろう」

彼が彼自身を何と言おうが、結局私は信じないと、彼は思っている。確かに幽霊です、宇宙人です、など言われたところで信じられるはずもなく、またそれを明瞭にする証拠もない。

「大事なことは自分がなんであるか、ということより、自分がどう思われるか、ということだ。自分で自分を証明することは不可能なことだ」

彼は相変わらず無表情のままそう答える。確かにそうかもしれない。屁理屈のようであり、理屈のようにも聞こえる。ここで問題なのは彼がなんであるのか、ということより、私が彼をどう思うか、ということ。そういうことだろう。

「しかしそれではお前も困るだろう。人間の概念に、俺のような存在と非常に似たような言葉がある」

「それは？」

「神、だな。名前こそ大仰だが、理解しようとせず、認識してしまえば楽だ」

認識しろ、ということはつまり、言われたことをそのまま受け入れろということかもしれない。リンゴを見せられ、『これはリンゴです』と言われたことをそのまま受け入れる。無条件でその果物はリンゴになる。なるほど、確かに楽だ。

「もう、わかった。何もかも素直に受け入れることにする。わけわからないことばっかり」

実際は考えるのに疲れたというか、考えても結局無駄というか。少なくとも人間ではないことは私も認めたわけである。それはつまり常識や考え方が全く違う生命体と会話をしていることになる。

「もし宇宙人と初めてあったらこんな風になるんだろうね」

「人間は人間以外と意思疎通をしたことがないからな。最初は困惑するのは当たり前だろう」

そう言う彼の顔に、わずかながら笑みが浮かんだような気がした。きっと彼も人間と会話をするのになれていないのだろう。

「さて、少し時間がかかってしまった。まだ本題に入っていないというのに・・・」

確かに本題には入っていない。しかし、もう何時間も論議したかのような疲労感がある。

「座ると言い。ここからはなるべく手短に話そう」

時間は正午を回っていた。彼の言葉に甘え、桜の木の根のあたりに腰掛ける。幹に触れた瞬間に、不思議な温かみを感じた。生物がもつ暖かさに似ているようで、心地よい。

「さて、お前のことだが」

私がいったいどうしたというのだろうか。今までで良い意味でも悪い意味でも何もしてこなかった私に今何が起こっているというのだろうか。

「正直、俺にもよくわからん」

彼はいたって真顔でそう言った。

「・・・え？だってあなた神様でしょ？」

「神様がすべてのことをお見通しだというのは間違っているということだな」

考え方によってはそうだろう。ここであんた本当に神？なんていいだすと話は堂々巡り。

「じゃあなんで私がヤバイってわかるのよ」

原因不明、証拠不十分で言われたとしても説得力はない。私は呆れてしまった。

「この桜の木は、わかるやつにはわかるがちょっと特殊な木でな」

彼も木の根元に腰掛ける。

「特殊って？死体が埋まってるとか？」

桜の木の下には死体があるという都市伝説のような話を聞いたことがある。実際そんなことがあるわずもないが。

「似たようなものだな。この桜の木には霊魂が宿っているのさ」

「え・・・？」

驚き、すぐさま立ち上がる。この桜がそんな代物だったとは。なにか罰が当たったらどうしよう。

「別に普通の桜と変わらんさ。人間の魂が宿ってるだけだ」

それだけでも十分怖い話だった。だけど、木に触れた時の暖かさや脈動は確かに嫌悪するものではなかった。

「優しい人の魂なんだろうね」

そう思うと、少しでも恐怖心を覚えたのが恥ずかしくなる。服装をただし、改めて座る。桜はまた優しく受け入れてくれる。

「其処がおかしい」

神が急に真剣な目つきになる。

「お前、霊能力とか、変なものが見える、とかないよな？」

「ないわね」

幸運なことにそんなオカルトちっくな能力は持ち合わせていない。持ちたいとも思ってない。幽霊が見えるなんて、冗談じゃない。

「そんなお前がこの桜の魂を認識できることがおかしい」

確かにそうだ。ここにきて、私に変な能力がついたのだろうか？現にこの神も実態はないはずなのに私には見えている。

「私に突然こんな能力がついた？」

「しかも割と最近、なんの脈絡もなく、な」

それは確かに変だ。なぜ急にそんなものを認識できるようになったのか。

「おそらくお前自身に原因はない。これは他からの介入だろう」

他、というのが原因ということか。なんというとばっちりを受けたものだ。

「じゃあ、私はこれからそーゆーものが見えるってこと？」

「おそらくな」

なんということだ。これから私は見たくないものまで見ていきなければならないのか。途端に気分は重くなる。今日の夜出たらどうしよう。

「他にも、お前だけじゃなくこの世界もゆっくりと変容していくだろう。お前の周辺からゆっくりと」

世界が変わっていく？私のせいで？

「変わったのは私だけじゃないの？」

「この世界は様々なパーツで出来ている。お前もそのピースの一つだ。それらが隙間なく集まって今の世界を構成している。お前というパーツが変容するなら、世界はそれに合わせて形を変えていく。この世界はそういうものなんだ」

「私に合わせてくれるわけね・・・。意外と優しいじゃない」

いつも生きていて味わうのは理不尽とかそんなものばかりだけど。

「でも人って急に成長したりするじゃない？そのたびに世界は組み替わってるんじゃないの？」

私はいつの間にか彼の言うことを認識するようになっていた。認識する、とは信じることに似ている。なら理解しようとすることは疑うことに似ているのかもしれない。

「生物にとどまることではないが、世界を構成するのは体や精神ではない。この桜に宿っているような魂だ。それは個人がどう変ろうが決して変わることのないもの。つまり、お前は魂自体が変化してしまった、ということだな」

話を聞いている限り、確かに私には手も足もでない話しではあった。しかし、

「神様ならなんとかできるんじゃない？」

断定したわけではないが、彼は神に似た存在、である。ならばそれ

なりの何かをもっているはずだ。

「出来ないこともないが・・・少々荒っぽいぞ？」

彼はその方法は乗り気ではないようだった。だが、どうにか出来るなら、なんとかするべきではないのか。私は幽霊など見たくはない。多少の荒っぽさだったら耐えれる自信はあった。

「お前の存在をなかったことにする。色々大変なんだ・・・。魂自体に問題があるならお前を生まれてこないようにしなきゃいけない。まずお前の両親の・・・」

「いえ、やっぱりいいです」

荒っぽいどころの話ではなかった。死ね、というどころの問題ではない。生まれてくるな、ということだ。

「だろう？こちらとしてもルール違反になるからあまりやりたくはないんだよ」

一応彼らの世界にもルールというものが存在するようだった。私は今ルールを守ることの大事さを改めて知った様な気がする。

「しかしこの場合は特例措置としてありか？」

「無しです」

彼らのルールにも特例があるようだった。自分がその事項に当てはまらないことを切に願う。

「俺の力は通常使ってはならない、と昔から定められていてな。人間が社会を形成するようになってからはほとんど使ってない」

「それは時間をもどすー見たいなこと？」

そんな力を持っているのならば神様と同義と言っても問題はないだろう。

「有から無を、そしてまた無から有を生み出す。簡単にいえば作るか消すか、だな。大雑把なもんだ」

勝手に作り、そして消してしまえる力。これ以上恐ろしい力があるだろうか。人間には触れることすらできない、人も物も消すも作るも自由自在。どうみても人には手の余る存在だった。そんな彼は私の隣に座り、ただ呆けている。

「本当に神様っぽいわね・・・」

「神様っぽいだろう？」

彼が少し微笑んだ気がした。それは神と言うにはやや幼い微笑みだ

った。

「で、これからのお前の行動についてだが」

しかしそれはすぐ無表情な顔へと戻っていく。

「基本普段と変わらない。普通に過ごしてもらっていい」

え、それでいいの？という顔をそのままだしてしまっていただろう。

「こっちだって扱いに困ってるんだ。仕方ないだろう。あと霊的なものは見えると思うがあんまりかまうなよ。この周辺は大丈夫だが

外ではな。憑かれるかもしれないし周りから見たら変人にしかみえんからな」

これからは霊的なものも見えてしまう。ようこそ私、オカルトの世界へ。もう絶対に心霊スポットなんかには近づかないようにしよう。

「この周辺はって、学校は神様がいるからってこと？」

さすが神の御力。

「俺にそんな力はねぇよ。この桜が厄除けになってるんだ」

なるほど、これが御神木なわけですか。

「じゃあこの桜の枝持ってたら大丈夫、とか？」

改めて見ればなかなかに立派な木。枝の一つぐらい頂戴してもよさそうだ。罰があたるかな？

「無理だな。厄除けになってるのは中の魂のほうだ。一定範囲外から出てしまえばただの枝だ」

詳しく聴けば、桜の効果範囲はわりと狭く、この学校の敷地内くらいだそうだ。残念ながら私の家までは範囲外。

「それは自分でなんとかしてくれ」

なんとか、と言われても。霊を払うなんてやったこともない。

「人間死ぬ気でやればなんとかなるんじゃないのか？」

神が気楽に言ってくれる。こんなことで困ったことないからそんな薄情なセリフが吐けるんだ。

「やばくなったら戻ってくればいい。ここまでは入れないだろうからな」

私の家からここまで結構距離あるんですけど・・・。

そんな会話をし続けて、いつの間にか二時を過ぎた。結局神からは具体的な解決策は聞けなかった。

「おなか減ったなー」

熱くなってしまって忘れていたのか、色々諦めた瞬間に何も食べていなかったことを思い出した。校内には学食があるが午前で生徒は帰宅予定なので今日は開いていない。

「でも帰りたくないなー・・・」

幽霊が見える。そう知って、この学園の敷地からでることがとても気が重い。

「堂々としていればおそらく大丈夫だ。実際そんなに霊なんているもんじゃない」

「本当にそうかな？墓地とか結構近いんだけど・・・」

「それは御愁傷さま」

せめて大丈夫とか言おうよ、と心で愚痴ったところで、後ろから目を塞がれた。

「ちょっと、悪ふざけは・・・」

「だーれだっ？」

神様の声じゃない。確実に女の声。背中にまた、触れているようで触れていない妙な感触がある。おそらく何かにのしかかられているのだろう。

「神様、これだれ？」

わかるわけがなかった。

「霊の類だな」

「この変は安全なんじゃ・・・？」

「悪霊は出ないな」

ではこれは普通の霊?普通な霊ってどんな霊だ・・・。

「ちょっとさっちゃん!私は精霊だよ!?そこらへんの霊と一緒にしてもらっちゃ困るよ?」

その瞬間手が離れ、視界が回復する。神様のほうへ突っかかっていったようだ。

「わかった、わかった、悪かったって」

あの神が押されている。顔にもわずかだが困惑の色が。やるな、この子。

身長は神と同じくらいだろうか。神とはうって変わり現代風のワンピースをきた、髪の長い女の子の容姿をしていた。こちらを見ると、今度は改まって、

「精霊のハルといいます。ちょっとわけありでここにいるんですけど、これからヨロシクね！」

と一方的によろしくされてしまった。悪い子ではなさそうなのでそれだけは救いだった。私も一応挨拶をして、その場を離れた。神はなにも言わなかったが、ハルという子は「またね」と手を振ってくれた。

帰り道、とにかく気を張って帰るしかない、と電車に乗り込む。学生の利用はほとんどなく、ぽつぽつと人が乗っているくらい。あいている席に腰掛け、窓から学校をみる。なかなかに濃い一日だった。それに、今思えば、私は今まででではありえないほど普通に初対面の神、精霊と会話をしていた。おそらく今真で家族以外では初めてだ。あまりのことの大きさに、いくらかの諦めやヤケもあったのかもしれない。

（ま、いいか・・・）

入学して初めて喋ったのが人間じゃないとは非常に滑稽かもしれない。そう考えているうちに降りる駅に着き、電車のドアが開く。外の世界は私の日常とはかけ離れた世界になっているのかもしれない。だけど私は胸を張って電車を降りる。一歩を踏み出すその気持ちに、迷いはなかった。

私が私であるために

あれから数日が経った。

幽霊の類が見えるようになったとはいえ、ほとんど生活に影響はなく、そして幸運ながらもそっち方面のトラブルもなく。非常に落ち着いた日々だった。

確かに霊は見える。ふとした瞬間に見えるときはあるが、ただ見えるだけだ。

高校生活も本格的に始まり、クラスの中で話をする人も増えている。神との一件で、もしや人と話すことも平気になったかと思えばそうではなく。相変わらず自分から積極的に行動は出来ていないのが現実だが。

「お前、なんで昼休みにここにいる？」

今はお昼休み。私は例の桜の木の下で一人弁当を食べている。

「お昼くらいどこで食べたっていいじゃない？」

冷凍海老フライを箸でつまみ、食べる。この神は大抵この場所に来れば会える。やることもないようなので、きっと暇なのだ。

「でもお昼って人間の友達と食べたほうがよくない？人間は付き合

いってのも大事でしょ？」

ハルもやってくる。この二人は常に一緒にいるようだった。私がいない時まで一緒かどうかはわからないけれど。そしてハルは意外と人間社会のことをよく知っている。

『精霊は実は人間と関わりが深い』

と、神は言っていた。この世の中の様々な現象には必ず精霊の働きがあるのだという。風が吹くのも、雨が降るのも、科学的根拠の裏に精霊の働きがあるのだそうだ。そして、ハルはその名前道理「春」を呼ぶ精霊なのだという。

「ま、たまにはね・・・」

実際には今日はいつものメンバーが全員食堂行きだったのだ。この学校には購買と食堂の二つの設備がある。購買には主にパンが並び、食堂には麺類や丼、定食などのラインナップ。味は悪くないレベルらしい。購買は安いがそれゆえに競争が激しく、友人の女子には少し辛い。で、結果的に食堂という選択肢になるのだが、我が高の食堂にはとある暗黙のルールがある。

『食堂においては弁当組および購買組は利用不可』

つまり食堂の席を使っていいのは食堂利用者のみ、ということ。理由は一つ、席が少ないからだ。これを破ると先輩方から白い目で見られること請け合いである。

というわけで私は一人教室で弁当、というわけになるが、それに耐えられずここにやってきた、というわけだ。

「なんだっていいがな。こぼすなよ？」

「あ、その卵焼き美味しそうー」

居ても問題などありはしないのだから、別にいいだろう。

「そーいえば、あなたたちは何も食べないの？」

愚かな質問だったかもしれない。いや、だがしかし御供え物という

習慣がある。これは神のようなものでもなにかを糧にするということではないのだろうか？

「食べることはできる」

神がそういうと、ハルが卵焼きをひょいっとつまみ。

「いただきっ」

と口に入れる。そしてそれは何事もなかったかのように彼女の口へと収まり、なくなっていった。

「体がないのに食事はできるんだ・・・・・味は感じるの？」

「んー、楽しい、優しい、そしてちょっと憂鬱な味、かな」

どんな表現だろうか。しかし、味覚とは少し違うようだった。

「俺たちが物質を取り込む必要はない。が、嗜好として取り込むときはそれに宿る感情や思念、などを取り込むことで力に変換することができる」

とりあえずは食事という行為は無駄なことではないようだった。そうすると、ハルの言った楽しい、優しい、ちょっと憂鬱というのは私の料理を作った時の感情というわけだ。かなり恥ずかしい。

「そ、そもそもあなた達の体ってどうなってるの？触れられないけどそこにある、不思議な感じ」

照れ隠しだ。もともと不思議ではあったことだが。ほめられるということに私は慣れていない。

「それはきっと加奈っちの魂が変異したからそう感じるんだね。普通の人にはなにも感じられないはずだよ。でもね、私たちと人間って、実はすごく似てるんだよねー」

精霊と人間が似ている？私からしたら何もかも違うように見える。
彼らの容姿は人間に似ているけど、それも自由に変えることができるらしい。

「どういうこと？よくわかんな――」

と、そこでなんと予鈴のチャイムが鳴る。

「五分前！？」

ここから教室まで頑張っても5分はギリギリになる。

「遅刻確定か？頑張ればいけるかもな」

神が残酷な真実を告げる。遅刻なんかで悪目立ちするのは避けたい。しかしダッシュで間に合っても家局目立つのは同じかも知れない。

「とにかく戻るっ！」

急いで弁当を片づけ、走って教室に戻る。

「いってらっしゃーい」

ハルの言葉に振り向いたとき、二人はもうそこにいなかった。

放課後、私はまた桜の木にやってきた。放課後でも桜の木周辺には人気がない。野球部やサッカー部の声がたまに響いているくらい。部活は必ず入らなければならないというわけではない。八割はどこかへ入部するが、残りの二割程度は帰宅部所属になる。

入らない理由は様々。アルバイトも禁止されてはいないのでアルバイトの子、特にやりたいことがない子、そして私みたいに人づきあいが苦手な子、など、それぞれの理由がある。私みたいなのは、逆にはいったほうが良さそうだが。

「おつかれー。今日は何しに来たの？」

珍しく神様はいないようだった。見上げると、ハルが木の枝に座り夕陽を眺めている。放課後は二日か三日に一回のペースで神様に会いにきている。なにか吉報があるかもしれないから。

他は大抵家に帰る。両親の仕事上、あまり家に帰れないので、夕食の準備などの家事は歩私がやっている。部活動に入らないのはそれが原因でもあったりする。

「話を聞きに。ハル、さっき人間と精霊が似てるっていってたから」

このごろ、霊が見える生活にもなんとか慣れ始め、とりあえず生活の地盤は固まってきたような気がする。

「思ったら、私神様とか精霊とかのことは全然しらないなーって思って」

彼らがどんな存在であるのか。受け入れはしたが、しかしあまりにも私は知らないことが多すぎる。彼らにかかわることができる以上、最低限のことは知っておくべきだと思ったのだ。

「それはねー、なんって説明したらいいかな。人間にあるものの一部の塊が私たちになるんだけどー・・・。これじゃ分かりづらいよね？」

私たちの一部の塊が精霊？・・・ハルには悪いが、まったくわからない。

「この世のすべての生物は魂、精神、肉体という三つの要素から成り立っている」

困っているハルを助けるかのように、隣に神がやってくる。いつもと変わらない無表情。だが、このごろ彼らにも感情というものがあることに気付き、徐々にではあるが彼の感情もくみ取れるようになってきた。人の顔色をうかがうのは得意だ。

「精霊のみならず、一般的な霊と呼ばれる存在は人間の精神の塊だ

と思っていい」

「つまり、人が死んだあと精神は霊になるってこと？」

「そうだな。人が死んだとき肉体は朽ち、魂は輪廻の環へと戻っていく。しかし精神はこの世にとどまり、精霊に吸収され糧となるか、霊などの存在になる」

なるほど、そういうことだったのか。世界は相変わらず上手く回るように出来ている。

「やっぱ難しいことはさっちゃんじゃないとねー」

ハルは神のことを「さっちゃん」と呼ぶ。ハルに聞いたところ、『「桜の神」だから「さっちゃん」』ということらしかった。

桜の神、の桜というのはまず間違いなくこの桜だろう。ちなみに私がそう呼ぶと不快な顔をされるので私はいわない。

「そーゆーわけでね、人間と精霊っていうのは割と近しい存在なんだよねー」

精霊は世界の事象をつかさどり、人間はそれを利用して生活する。

そして人間が死ねば精霊として世界の一部になる。

「じゃあ神様は？」

私は上を向くのに疲れ、木の根元の定位置に腰掛ける。グラウンドからは野球部の掛け声が響いてくる。

「そうだな、言ってしまえば魂だけの存在、だな」

「人間の魂って、さっき聞いたけど死んだら輪廻の環にもどるんじゃないの？」

輪廻転生。魂は永久に失われず輪廻の環を通りこの世に再び生を受けることだ。

「だ、か、ら、神様なんでしょー？」

ハルが私の隣に現れる。確かにそうだ。しかしそれでは色々と世界のありようにとって不整合な事態が起きるのではないか？

「例えだよ例え。それに似てる、ということだ。実際人間の魂を抜

きだせたとしても神の力を使えるとは限らないからな」

結局、神という存在はやはり神秘のヴェールに包まれているのだった。

「人間は結構万能なんだぜ？精霊にも、神にもないものをそれぞれ持ってる」

神には精神と体がなく、精霊には魂と肉体がない。人間とは根本的に違う存在。

「私の意識形成にも人間の女の子の精神を使わせてもらっているんだよー」

でも、触れあってしまえば、なんてことはない。人間と変わらない部分だっていくつもある。これは知り合ってから薄々感じていたことだった。むしろ肉体のあるなしをのぞいてしまえばほぼ人と変わらないのように加奈は思い始めていた。

「なんか人間よりそっちのが気楽でいいのかもね」

人間という生き物は面倒な生き物だ。一人では決して生きていけず、常に群れなければいけない。そのための準備に人生の四分の一ほどの時間を要する。それだけ時間をかけても上手くいくとは限らない

のだから困ったものだ。その点、神や精霊は完璧に独立している。何にも依存せず、ただそこに存在できる。私にとって彼らのような生き方は理想的だ。

「馬鹿言え、こっちにだって色々あるんだよ。特に今はお前見たいな奇怪な奴も出てきたしな」

依然私の問題は継続中。しかし本人はさしてやるべきこともなく、霊的なものが見えるという生活にも慣れ始めている。人間の適応能力は予想以上にすごいものだった。しかし、それならばなぜ私は本来の高校生活になかなか馴染めないのだろうか。

「私は人間の生活って面白いとおもうよ？あんなに仲間も一杯で、ちょっとうらやましいかも」

「面倒なだけだよ。気を遣うし、本心はどう思ってるかなんてわかんないんだしね。学生だと色々問題もあるんだよ、派閥とかさ。女子は男子と違って陰険な部分も多いから、なにがきっかけでイジメの引き金になるのかわかんないんだよ」

思えば思うほど溜息をつきたくなる。人間関係は複雑にも程があるのだ。特に思春期真っ只中な私たちの年頃ではなおさら。

「面倒なのはお前の性格だと思うがな。一度しかない命だ、与えられた自由を最大限に利用して生きればいいじゃないか」

簡単に言ってくれる。福祉国家日本といえど働かなくては生きてはいけないのだ。

「現実は言葉ほど簡単じゃないのよ。っともうこんな時間か・・・今日はもう帰るね」

携帯には五時過ぎと表示されていた。夕陽もそろそろ沈みかけている。日増しに日照時間が増えているな、と思う。

「精々がんばって生きてくれ。またな」

そう言って神は消えていった。いつも思うのだが彼らは消えた後何処へ行くのだろう。

「ハルも、またね」

「加奈っち、ちょっと」

珍しくハルは私に用があるらしかった。歩きながらでもいい、というので、駅へ向かいながら話すことに。ハルはふわふわと宙に浮きながら私の隣に並んだ。

「ああゆうこと、さっちゃんの前であんま言わないほうがいいかも」

さっきのことだろうか。私は周囲の目を気にして極力小声かつ無表情で対応する。

「それは・・・どの言葉？」

彼女のほうをみると、珍しく真剣な表情をしていた。というか彼女に関しては笑顔しか見たことが私にはなかった。

「面倒だ、とかね。生きるのが面倒だとかさ、そういう否定的な発言はさっちゃんも、私も好きじゃない」

生きるのが面倒。さっきの発言に、正直私はそこまで意味を込めたつもりがなかった。せいぜい、人間と付き合うというのは面倒、という程度だ。

「違うって、そういうことじゃなくてね、なんというか」

価値観や視点の違いなのだろうか。私の小さな愚痴を彼女はあまりに大きくとらえすぎているような気がした。人間関係が鬱陶しく思えることは誰にだってあることだ。そこに生だの死だのの概念はない。

「加奈っちはさ、後ろ向きすぎなんだよ。後ろを向いてるから怖くて前に進めない、そこでずーっと止まったまんま。みんなは普通に歩いて行っちゃうのにね」

ずばりこの指摘は非常に的を得ていて、だからこそ私には、柄にもなくすこし逆上してしまうほどの効力をもっていた。

「精霊なんかに人間の何がわかるのよ・・・」

私はすぐに後悔する。今の言い方は少しきつかっただろうか。ハルはおそらく善意で向かってきているというのに、私はいつも後ろ向きに答えることしかできない。そんな自分が嫌になる。

言ってしまった手前、なんだか気まずくてハルの表情をうかがうこともできない臆病な私。きっと愛想を尽かされるだろう。こんなことを言ってしまったのはハルが初めてかもしれない。

「精霊だからわかることもあるんですっ」

しかしハルはいつもの口調で話しかけてくれる。不快な思いをさせてしまったと思った。実際そうだろう。きっと彼女は私より遥かに大人であったのだ。そして、きっと彼女らは私をどこかで見ていてくれたのかもしれない。

私がいまいちクラスに馴染んでいないということもきっと知っているに違いなかった。夕陽がいつもより眩しく感じる。なんとおせっかいな奴らなんだろう。この二人は、たった数日一緒に暮らしただけで、もはや私の両親よりも私のことを理解しているのかもしれない。

「で、私はどうすればいい？」

私は助けを求めた。どうすれば前を向き、進むことができるのか。いままでに何度もそう思うだけだった。相談することも出来ずにいた。そして、このままでは前と変わらないということは薄々気づいていたから。

「自然体でいいんだよ。私やさっちゃんと居るときと同じでいいの。普段前に歩くのに意識はしないでしょ？」

最初は呆れた。アドバイスになっているのかどうかもわからず、そのうち笑いたくなってきた。しかし、一人で笑っていると変人に見られるのでこらえる。その波が収まると、実にすがすがしい気持ちだった。

「自然体ね・・・。さすが精霊さん、参考になるわ」

思えば私は自分を理解してもらおうという気持ちがなかった。相手の都合のいい人間になろうとしていたのかもしれない。それではダメだ。それは私ではないのだから。

さらに私は、いつの間にか人付き合いが面倒だという設定を作り、いかにもそれが私であると表現していたのだ。二重三重に築かれた偽の私が、そこには存在した。

「精霊の半分は優しさで出来ているのだよ」

ハルはウィンクとともに悪戯っこのような笑みを浮かべた。どう突っ込めばいいのかがわからなかったが、そういえば人間の一部も精霊と同じなんだよね、と気付いた。

私の精神も半分は優しさなのだろうか。そうだったらいいな、とあえて突っ込まないでおくことにした。桜の花びらはもう少しで散ってしまいそう。

私を取り巻く世界が変わって、季節も変ろうとしている。それに呼応するかのように、私も少しずつ変わっていく。そして歩きだす。これが、記念すべき第一歩。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2745i/

神様のキセツ

2010年10月15日20時48分発行